



Robert Schumann: Complete Symphonic Works, Vol. V

aud 97.718

EAN: 4022143977182



4 0 2 2 1 4 3 9 7 7 1 8 2

Record Geijutsu (2016.12.01)



Japanische Rezension siehe PDF!



The Record Geijutsu Disc Review The Record

岡部真一郎●Shinichiro Okabe

【推薦】ホリガー指揮によるショーマンの協奏曲2曲は2015年の2月と3月にセッション録音されたもの。まず目を引くのが、ヴァイオリン協奏曲の共演者にコバチンスカヤを迎えてのことだろ。彼女のソロは相変わらずのエッジの鋭さで、この作品に新たな光を当て、既存のイメージにとらわれることなく自由に性を羽ばたかせている。大きな構造から見れば、独特の時間が流れる練習樂章と両端樂章との対比などは何よりもアプローチの核となるところだろうし、一方ボウイング、アーティキュレーションなどのディテールから、各樂章の設計など至るところに彼女の個性的な刻印が明らかだ。一方のピアノ協奏曲の独奏は1968年ブダペスト生まれのハンガリーのピアニスト、演奏活動の傍ら母校リスト音楽院で教鞭をとるヴァーリヨン。すでにホリガーとは彼の師であるヴェレスの弟子で、スクでの共演、あるいはECMでの作品集の制作などもあって、それらを踏まえての今回の起用というところか。第1樂章に典型的なように、存外すつきとした見通しを保つつ、歌うところは存分に歌い、純度の高い詩情に満ちたショーマンを奏でている。作曲家、そして指揮者としてのホリガーの永年のシーランへの並々ならぬ思い入れは、生き生きとしたリズムが印象的なヴァイオリンが響きを集めたアルバムだ。幕開け、作品134をはじめ、ピアノ独奏を務めるのは1960年生まれのドイツのピアニスト、ECMに「クライスレリアーナ」とホリガーアー作品をカッティングしたディスクなどもあるロンクヴィヒ。2月の収録だ。作品92におけるバッシンとクールな視線のバランスは、ホリガーの志向性とも響きあうところと見える。

『幻想曲』は別項のヴァイオリン協奏曲と同じくピアノ作品に先立つて録音されたもの。独奏はもちろん、コバチンスカヤでも、管弦樂の色彩に特異な突出を与える存在としてとらえている。ならばこの選曲、そしてホリガーならではのアプローチが随所に見て取れる上、何よりもしっかりと手応えを感じさせる内容の充実がある。ちなみにホリガーは先頃、今年度の「ツヴィッカウ・ショーマン賞」を受けている。

岡部真一郎●Shinichiro Okabe

別項と同様、ホリガー指揮の交響作品全集6巻の一環。ケルンの西ドイツ放送制作の音源、2015年、同地の大聖堂や中央駅、ルートヴィヒ美術館などに隣接し、ライン川沿いに建つフィルハーモニーで行なわれた録音である。いわゆるコンツエルトシユテュックを集めたアルバムだ。幕開け、作品134をはじめ、ピアノ独奏を務めるのは1960年生まれのドイツのピアニスト、ECMに「クライスレリアーナ」とホリガーアー作品をカッティングしたディスクなどもあるロンクヴィヒ。



(5月号)
CD 42
43

■ショーマン:序奏とアレグロ/ヴァイオリンと管弦樂のための幻想曲/ピアノ協奏曲(序奏とアレグロ・アバランショナート)/4本のホルンと管弦樂のためのコンツエルトシユテュック

ハイント・ホリガー指揮ケルン西ドイツ放送交響樂団、アレクサンダー・ロンクヴィヒ(p)、バトリア・コバチンスカヤ(vn)他
(詳細は卷末新譜一覧表参照)
[アウディーテ@KKC5663] ¥3000

神崎一雄●Kazu Kanzaki

【録音評】ケルンのフィルハーモニーにおける2015年2月、3月の3回の収録だが、日時が近接しており場所と録音クルーが同じであることによって、アルバムとしてのサウンドに統一感があるのが印象的。空間の響きをほどよく生かしたオーケストラ音場の豊かな展開やほどよいソロのクローズ・アップが、スケール感と爽快感とを呼ぶが、これが全編で保持されていて安定感が高い。
(90)

——

神崎一雄
Kazu Kanzaki

【録音評】ケルンのフィルハーモニーにおける2015年2月、3月の3回の収録だが、日時が近接しており場所と録音クルーが同じであることによって、アルバムとしてのサウンドに統一感があるのが印象的。空間の響きをほどよく生かしたオーケストラ音場の豊かな展開やほどよいソロのクローズ・アップが、スケール感と爽快感とを呼ぶが、これが全編で保持されていて安定感が高い。
(90)

相場ひろ●Hiroyuki Aiba

【推薦】ピアノのロンクヴィヒはショーマンを得意とするだけでなく、作曲家ホリガーの作品を録音してもらっているので、共演者として理屈なピアノटとと言える。室内樂的な作品92と協奏曲的な作品134、どちらにおいても遅めのテンポをとりながら、ピアノと管弦樂の対話を緊密に保つと共に、グララと歌い過ぎることを避けていたため、樂器としてはむしろ引き締まった印象を受けるのが面白い。ホリガーの指揮はピアノに対する管弦樂のソロをよく浮き上がらせるなど、ピアノを突出させずに全体の響きの中に入りこみにプレンドして、一体感を強く印象づける。それでいて樂想間の対比はむしろ明快であり、メリハリの強い音楽を展開していく点に彼の個性が感じられる。

『幻想曲』はコバチンスカヤが独奏を務める。ラブソディックな曲想ゆえ、作品との相性はヴァイオリン協奏曲よりも強く感じられるかもしれない。ホリガーも協奏曲のときよりは明るい音色を基盤として、独奏対伴奏のシンブルな図式をより意識した演奏を聴かせる。

4本のホルンのための『コンツエルトシユテュック』でのホ

リガーアーは、4本のホルンを管弦樂に対置する独奏群としてよりさまざまなかみに音を割り、ときにくすんだ色合いでアンサンブルを合わせ、さまざまな音色を作っていく。そうした合奏についての考え方方が興味深い。

峰尾昌男●Masao Mineo

【録音評】1か月ほど間をおいて録られているが、音の違いは特にない。セッションだがライヴ感を重視したような音作りで、オーケストラの音色は少し距離を置いて全体を俯瞰するような雰囲気で、オーケストラ内のソロもさほどクローズ・アップされていない。またソロのヴァイオリン、ピアノとも少し距離を置いた集音でオーケストラとはよく溶け合う。高域の抜けが少々不足か。(90)



■ショーマン:ヴァイオリン協奏曲/ピアノ協奏曲

ハイント・ホリガー指揮ケルン西ドイツ放送交響樂団、パトリシア・コバチンスカヤ(vn)、デーネシュ・ヴァールヨン(p)
[アウディーテ@KKC5662] ¥3000

相場ひろ●Hiroyuki Aiba

【推薦】ピアノ協奏曲は近年ホリガーとの共演の多いヴァーリヨンが独奏を務める。第1樂章冒頭のあつさりとしたスフォルツアンドや、第1主題の快速のテンポ設定から明らかなように、ロマンティックに肥大し、あちこちでテンポを緩めてたっぷりと歌う演奏とは正反対に、引き締めた進行が目につく。ピアノ協奏曲は、速めのテンポの中できらんと旋律を歌わせたり、転調の継ぎやシーケンスの転換をきちんと際立たせたりと、豊かなニュアンスを込めていくが、私の強いヴィルトゥオーザの音楽を聴かせるよりも、長大な分散和音の連続では管弦樂とのフレンドを優先させるなど、アンサンブルに強く意を用いた演奏となっている。指揮者ホリガーも、コマーブラントのためなど過剰なロマンを戒め、独奏との一体感を前面に出して進めていく意識が強い。その一方で、第2樂章では旋律の歌わせ方に思わず粘りを見せるなど、杓子定規に陥らない自在な振りぶりをみせるのが興味深い。

ピアノ協奏曲とは異なり、ヴァイオリン協奏曲でのホリガーハイントの彼女らしく、ヴィブラートを抑制した上で、凹凸の多いザラッとした質感の音色で陰翳の濃い歌を歌い継いでいく。両者と共に西洋音楽らしい朗々とよく鳴る音響作りに背を向けている点、ショーマンの音楽にふさわしい解釈だと思う。

ハイント・ホリガー指揮ケルン西ドイツ放送交響樂団、パトリシア・コバチンスカヤ(vn)、デーネシュ・ヴァールヨン(p)
[アウディーテ@KKC5662] ¥3000